

乳幼児期の子どもをもつ母親の育児ストレス (第2報)

—対象特性からみた育児ストレス—

舟越和代¹⁾*, 榮 玲子¹⁾, 小川佳代¹⁾, 野口純子²⁾, 三浦浩美¹⁾, 松村恵子¹⁾

¹⁾ 香川県立医療短期大学看護学科

²⁾ 香川県立医療短期大学専攻科助産学専攻

Child-Rearing Stresses of Mothers of Infants (Part2) —Comparative Analysis of Stressors—

Kazuyo Funakoshi¹⁾*, Reiko Sakae¹⁾, Kayo Ogawa¹⁾, Junko Noguti²⁾,
Hiromi Miura¹⁾, Keiko Matsumura¹⁾

¹⁾ *Department of Nursing, Kagawa Prefectural College of Health Sciences*

²⁾ *Advanced Course of Midwifery, Kagawa Prefectural College of Health Sciences*

Abstract

The stressors of 143 mothers of the present study conducted in a local city were compared with the stressors of mothers of a prior study conducted in the Tokyo metropolitan area. Although “mother’s sense of rearing child by herself” and “mother’s sense of being isolated from society” were extracted as separate stressors in the prior study, the two factors appeared as a single stressor in the present study. “Mother lacking knowledge/experience for child care” was extracted in the present study alone. “Husband’s nonparticipation in child-rearing and housekeeping (husband regards child care as mother’s role)” and “child always at mother’s heels” were extracted in both the present and prior studies.

It was also suggested that the stresses of mothers who did not go to work or had a single child were intenser than those of mothers who went to work or had two or more children. Thus, it would be necessary for us to create an environment where mothers who do not go to work or have little experience can bring up their children easily without being isolated from society.

Key words : 育児ストレス (Child-rearing stress),
育児ストレス— (stressor in child care),
母親 (Mother), 就労 (Working)

* 連絡先 : 〒 761-0123 香川県木田郡牟礼町原 281-1 香川県立医療短期大学看護学科

* Correspondence to: Department of Nursing, Kagawa Prefectural college of Health Sciences,
281-1 Hara, Mure-cho, Kagawa 761-0123, Japan

緒 言

母親の育児不安や育児ストレスについては、子どもの健全な育成を阻害するものとして、児童虐待の増加とともに近年の社会問題となっている。母親自身の心身の健康や子どもの健全な発達に有効な育児支援について考えることは重要であり、育児中の母親のもつストレス内容と程度およびそのストレスにおける関連要因を明らかにすることで、K県における具体的な育児支援を検討する資料の一助としたいと考えた。Lazarus & Folkman (1984)¹⁾は、日常生活の中で起きる或る出来事(ストレス)に対する認知的評価が対処行動を決定し、その結果がストレス反応として現われるという心理学的ストレスモデルを提唱している。

このモデルを基に考えると、育児支援の方法について検討を進めるにあたっては、まず乳幼児の母親が子育てする上でのストレスは何かを明らかにした上で具体的な対処行動を分析していくことが育児支援につながるといえる。日下部ら²⁾は発達心理学的視点から育児ストレス状況に着目し、子どもの行動、日常生活における母親自身の問題、および母親と夫あるいは子どもとの関係という3側面から、育児中の母親の育児ストレスが測定できるストレス尺度を開発した。育児不安やストレスそのものに焦点をあてた研究はいくつかあるが、育児ストレスを測定する尺度は、他にはみあたらなかった。日下部ら²⁾は、この尺度を用いて、首都圏の乳幼児の母親を対象に因子構造の検討を行っている。

我々は、地方都市に住む母親の育児支援を目指しており、首都圏とは環境が異なることから、その違いが因子構造に影響を及ぼすことが予想された。そこで、まず、K県の3歳児健康診査で協力の得られた母親を対象に、育児ストレス尺度を用いた調査を行ない、得られたデータから母親の育児ストレスの因子構造を確認した³⁾。今回は、抽出された育児ストレスの因子構造について、日下部ら²⁾の研究結果と比較し、K県の母親への育児支援の方向性を探ることを目的とした。

研究方法

1. 期間

平成13年10月～12月。

2. 対象者

K県内7箇所の3歳児健康診査に来所した母親344名中、有効回答であった143名(有効回答率41.6%)。

3. 方法

1) 調査内容

対象の属性(年齢、就労状況、趣味活動の有無、子ども数、家族構成等)および日下部ら²⁾の育児ストレス尺度(Maternal Parenting Stressor Scale:MPSS)31項目(表2参照)。31項目は、「全く感じない1点」から「いつも感じる4点」の4段階リッカートスコアからなる。なお、本調査では、31項目の中で「18.仕事を辞め、会社との社会との繋がりが切れた」は欠損値(n=93, 62.8%)が多く、因子負荷量(0.464)、共通性(0.447)も低かった為、最終的に因子分析から除外している。

2) 倫理的配慮

3歳児健康診査を実施している公的機関の承諾を得た後、研究目的を説明し、了承を得た母親に質問紙を配布、郵送にて回収した。分析にあたっては対象者が特定されないようにした。測定用具の使用については、書面で作成者の承諾を得た。

表1 対象の特性(属性の比較)

	本調査 n=143	先行研究* n=263
平均年齢	31.9±4.1歳	33.2歳
夫の平均年齢	34.5±4.7歳	35.8歳
就労状況		
就労	55.2%	31.2%
非就労	44.8%	68.8%
子どもの人数		
1人	20.4%	34.6%
2人	57.5%	51.0%
3人	17.6%	12.9%
4人	3.5%	1.1%
5人	0.7%	0.4%
家族形態		
核家族	86.7%	83.7%
複合家族	13.3%	16.3%
当該児の性別		
男子	47.6%	46.6%
女子	48.9%	53.4%
不明	3.5%	
出生順位		
第1子	49.6%	56.4%
第2子	39.2%	36.4%
第3子	7.0%	6.4%
第4子	2.8%	0.4%
第5子	0.0%	0.4%
不明	1.4%	0.0%

*文献2)

表2 因子構造の比較

本研究				先行研究*				
		n=143				n=263		
因子	因子名	質問項目	因子負荷量 α 係数	因子	因子名	質問項目	因子負荷量 α 係数	
I	子どもの聞き分けのない行動	11. 聞き分けがない	0.79	I	子どもの聞き分けのない行動	聞き分けがない	0.79	
		8. 言うことを聞かない	0.73			言うことを聞かない	0.66	
		9. 癩癩を起こす	0.63			ぐずるとなだめにくい	0.60	
		6. 大人の理屈が通らない	0.57			0.84	癩癩を起こす	0.54
		10. ぐずるとなだめにくい	0.55			大人の理屈が通らない	0.52	
		7. よく泣く	0.55			よく泣く	0.44	
		22. 子どもの泣いている理由が分らない	0.43					
II	自分の時間がない	12. 自分の時間がない	0.70	II	自分の時間がないこと	自分の時間がない	0.73	
		14. 一人になれる時間がない	0.68			一人になれる時間がない	0.64	
		27. 子どもを育てるために我慢をしていることがある	0.65			自分のペースが乱れる	0.58	
		25. 子どものために仕事や趣味を制約される	0.64			0.87	子どものために仕事や趣味を制約される	0.57
		26. 毎日同じことの繰り返しをしている	0.58			家事を全てする時間がないこと	0.53	
21. 自分のペースが乱される	0.53							
III	一人きりの子育て・社会からの孤立	23. 一人きりで育児をしている	0.66	III	夫の無理解・非協力的態度	夫が育児に非協力的である	0.85	
		20. 子どもと2人だけで家にいる	0.64			夫が家事に非協力的である	0.75	
		24. 短時間子どもを預けられる人がいない	0.63			0.86	育児は母親の仕事だと夫は思っている	0.72
		19. 自分と子どもだけの世界で、社会との接点がない	0.52					
28. どうしついたらよいか分らなくなる	0.52							
IV	夫の無理解・非協力的態度	30. 夫が育児に非協力的である	0.81	IV	子どもへの対応・しつけが分からないこと	よその子どもとの間に問題を起こしたときの対処の仕方が分からない	0.69	
		31. 夫が家事に非協力的である	0.76			0.84	子どもの泣いている理由が分からない	0.54
		29. 育児は母親の仕事だと夫は思っている	0.71			他の親としつけ方が違う	0.47	
						どうしついたらよいか分らなくなる	0.40	
V	子どもの食行動における問題	2. 思うような食べ方をしてくれない	0.78	V	一人きりで子育てをしていること	短時間子どもを預けられる人がいない	0.60	
		1. 自分で食べたがらない	0.57			0.67	一人きりで育児をしている	0.51
		3. 子どもが少食である	0.54			毎日同じことの繰り返しをしている	0.49	
						子どもを育てるために我慢をしていることがある	0.48	
						子どもと2人だけで家にいる	0.46	
VI	親としての対応	16. 他の親としつけ方が違う	0.81	VI	子どもの食行動における問題	子どもが少食である	0.70	
		17. 家事を全てする時間がないこと	0.49			0.69	思うような食べ方をしてくれない	0.65
		15. よその子どもとの間に問題を起こしたときの対処の仕方がわからない	0.46			自分で食べたがらない	0.61	
						子どもに食べさせなくてはならない	0.41	
VII	子どもにまわりつけられること	5. 一人にすると泣く	0.63	VII	社会からの独立	自分と子どもだけの世界で、社会との接点がない	0.80	
		4. まわりついて離れない	0.57			0.67	仕事を辞め、社会との繋がりが切れた	0.71
VIII	子どもに食べさせられること	13. 子どもに食べさせなくてはならない	0.60	VIII	子どもにまわりつけられること	まわりついて離れない	0.71	
						0.75	一人にすると泣く	0.63

*文献2)

3) 分析方法

本研究では、日下部らの研究²⁾(以下、先行研究とする)との比較を以下の方法で行なった。まず、属性およびストレッサーを問う質問項目の記述統計量の比較を行なった。次に因子構造を比較し、続いて抽出された因子を構成する質問項目(以下変数とする)について検討した。

次に、先行研究との比較において差異が認められた就労・非就労及び子ども数について、抽出された因子別に平均値の比較を行なった。就労・非就労については、等分散が認められた因子はt検定、認められなかった因子はMann-Whitney-U検定を用いた。子ども数については、一元配置分散分析と多重比較を行なった。有意確率は、 $p < 0.05$ を採用した。統計解析には、統計パッケージSPSS10.0 for Windowsを用いた。

結 果

1. 対象者の属性の比較(表1)

子ども数1人の割合が、先行研究では34.6%であったのに比べ、本調査では20.4%と少なかった。また、就労率が、先行研究では31.2%であったのに比べ、本調査では55.2%と多かった。

2. MPSS 質問項目毎の記述統計の比較

先行研究では、全ての変数において「全く感じない」と答えた母親は50%以下であった。本調査では、「24. 短時間子どもを預けられる人がいない」62.9%、「23. 一人きりで育児をしている」61.5%、「20. 子どもと2人だけで家にいる」56.6%、「22. 子どもの泣いている理由がわからない」50.3%の計4変数において50%以上の母親が「全く感じない」と答えていた。

3. 因子構造の比較(表2)

本調査対象の因子構造は、先行研究に比べ全体に因子負荷量が高く、固有値1以上を解釈した場合の累積寄与率も、先行研究37.98%に比べ、55.64%と高かった。30変数全体における α 係数は、0.846と信頼性が得られるものであった。

先行研究と同じ変数で構成される因子は、『夫の無理解・非協力的態度』と命名された第IV因子(「30. 夫が育児に非協力的である」、「31. 夫が家事に非協力的である」、「29. 育児は母親の仕事だと夫は思っている」の3変数で構成される)と、『子どもにま

わりつかれること』と命名された第VII因子(「5. 一人にすると泣く」、「4. まとわりついて離れない」の2変数で構成される)の2因子であった。先行研究ではそれぞれ第III因子、第VIII因子として抽出されていた。これらは、対象者の属性に関わらず同じように抽出される因子であった。

第I因子『子どもの聞き分けのない行動』では、「11. 聞き分けがない」、「8. 言うことを聞かない」、「9. 癪癪を起こす」、「6. 大人の理屈が通らない」、「10. ぐずるとなだめにくい」の5変数が先行研究と同じように抽出された。「22. 子どもの泣いている理由が分からない」は、本調査のみに抽出された変数であり、変数毎の相関行列をみると「言うことを聞かない」との相関が高い($r = 0.404$)ことが確認された。

第II因子『自分の時間がない』では、「12. 自分の時間がない」、「14. 一人になれる時間がない」、「25. 子どものために仕事や趣味を制約される」、「21. 自分のペースが乱れる」の4変数が、先行研究と同じように抽出された。他に先行研究の変数には、「家事を全てする時間がないこと」が認められていたが、本調査では認められなかった。本調査の「17. 家事を全てする時間がないこと」は、相関行列をみると「21. 自分のペースが乱れる」との相関も高い($r = 0.445$)が、一方で「16. 他の親としつけ方が違う」との相関も高く($r = 0.449$)第II因子では抽出されなかった。一方、本調査では、「27. 子どもを育てるために我慢をしていることがある」、「26. 毎日同じことの繰り返しをしている」が変数として抽出されていた。

第V因子『子どもの食行動における問題』では、「2. 思うような食べ方をしてくれない」、「1. 自分で食べたがらない」、「3. 子どもが少食である」の3変数が先行研究の第VI因子『子どもの食行動における問題』と同じように抽出された。「13. 子どもに食べさせなくてはならない」も先行研究ではこの因子の変数として抽出されているが、本調査では第VIII因子として独立して抽出された。

第III因子の『一人きりの子育て・社会からの孤立』は、先行研究では『一人きりの子育て』と『社会からの孤立』が個々の因子として独立していた。本調査のこの因子の変数である「23. 一人きりで育児をしている」、「20. 子どもと2人だけで家にいる」、「24. 短時間子どもを預けられる人がいない」は、先行研究でも認められた変数であった。本調査のみで認められた変数である「19. 自分と子どもだけの世界で、社会との接点がない」は、相関行列をみると

「20. 子どもと2人だけで家にいる」($r = 0.463$)が一番高く、次いで、「23. 一人きりで育児をしている」との相関が高かった($r = 0.428$)。また、「28. どうしついたらよいかわからなくなる」は、「15. よその子どもとの間に問題を起こした時の対処の仕方がわからない」との相関も高い($r = 0.462$)が、「23. 一人きりで育児をしている」($r = 0.453$)、「20. 子どもと2人だけで家にいる」($r = 0.422$)、「19. 自分と子どもだけの世界で、社会との接点がない」($r = 0.415$)、の変数とも相関が高いことが確認された。

第V因子『親としての対応』(「16. 他の親としてけ方が違う」, 「17. 家事を全てする時間がないこと」, 「15. よその子どもとの間に問題を起こしたときの対

処の仕方がわからない」の3変数で構成される)は、今回の調査でのみ抽出された因子であった。

4. 対象特性と因子の関連 (表3, 4)

先行研究の属性と差が認められた、母親の就労・非就労について、本調査で抽出された8因子について、就労・非就労間で平均値の差の検定をした結果、第I因子『子どもの聞き分けのない行動』($p < 0.05$)と、第III因子『一人きりの子育て・社会からの孤立』($p < 0.0001$)に有意差が認められた。この2因子において、非就労者の方が得点が高く、ストレスが高いことを示していた。

先行研究と差が認められた子ども数については、

表3 就労・非就労別育児ストレス得点の比較 n=143

因子	因子名	就労 n=79	非就労 n=64	
		Mean (SD)	Mean (SD)	
I	子どもの聞き分けのない行動	2.18 (0.56)	2.39 (0.55)	*
II	自分の時間がない	2.49 (0.71)	2.66 (0.77)	NS
III	一人きりの子育て・社会からの孤立	1.51 (0.47)	2.10 (0.73)	**
IV	夫の無理解・非協力的態度	2.08 (0.83)	2.23 (0.92)	NS
V	子どもの食行動における問題	2.00 (0.65)	2.17 (0.71)	NS
VI	親としての対応	2.38 (0.72)	2.60 (0.76)	NS
VII	子どもにまわりつかれること	2.18 (0.75)	2.14 (0.69)	NS
VIII	子どもに食べさせること	2.43 (0.96)	2.63 (1.02)	NS

* t-test $p < 0.05$

**Mann-Whitney U test $p < 0.0001$

NS:Not Significant

表4 子どもの数と育児ストレス得点の関連 n=142

因子	因子名	子ども数			F値
		1人 n=29	2人 n=82	3人以上 n=31	
		Mean(SD)	Mean(SD)	Mean(SD)	
I	子どもの聞き分けのない行動	2.14 (0.46)	2.32 (0.59)	2.29 (0.59)	1.099 NS
II	自分の時間がない	2.54 (0.66)	2.54 (0.79)	2.70 (0.69)	0.566 NS
III	一人きりの子育て・社会からの孤立	2.04 (0.81)	1.70 (0.59)	1.72 (0.67)	3.023 NS
IV	夫の無理解・非協力的態度	2.46 (0.85)	1.97 (0.80)	2.26 (1.00)	3.732 *
V	子どもの食行動における問題	2.62 (0.71)	2.35 (0.70)	2.65 (0.86)	2.514 NS
VI	親としての対応	1.99 (0.57)	2.08 (0.71)	2.17 (0.69)	0.512 NS
VII	子どもにまわりつかれること	2.33 (0.75)	2.10 (0.67)	2.16 (0.83)	1.027 NS
VIII	子どもに食べさせること	2.54 (0.92)	2.46 (1.00)	2.68 (1.05)	0.524 NS

* 一元配置分散分析 多重比較 $p < 0.05$

NS:Not Significant

子ども数1人、子ども数2人、子ども数3人以上に分け、因子毎に一元配置分散分析と多重比較を行なった結果、第IV因子『夫の無理解・非協力的態度』に有意差が認められた。子ども数1人の方が、子ども数2人に比べ夫の理解や協力が得られていないと思っていることを示していた。

考 察

本調査（地方都市）と先行研究（首都圏）の因子構造で最も違いが出たのは、『一人きりの子育て・社会からの孤立』、『親としての対応』であった（表2参照）。『一人きりの子育て・社会からの孤立』については、本調査の方が就労率が高かったこと、また、この因子を構成する項目のほとんどについて本調査対象者の方が「全く感じない」と答えた率が高かったことが今回の対象者の育児ストレス因子構造に影響を与えたのではないかと考える。日下部らの調査によると、母親の就労・非就労と育児ストレスとの関連については、ストレス得点には有意な差は認められていない⁴⁾。しかし、本調査では、就労していないということが、子どもの言動そのものもストレスになるし、特に社会との繋がりが無く、一人きりで子育てしているという思いを持ちやすいということがわかった（表3参照）。非就労者の方が孤立感が強いということは、専業主婦の方が生活の中で育児の占める比重が高くストレスが高い⁵⁾という結果とも一致する。非就労者の場合は、子どもと一しょに地域社会へ出て行くことも社会との繋がりがあがるが、思うように出て行ける環境が整っていない場合、ストレスが強くなることが予測される。そこで、子育てのことを相談できる仲間との繋がりがあれば、一人きりの子育てという孤立感は軽減されるのではないだろうか。非就労者が孤立しないような支援が今回の対象者には必要といえる。つまり非就労者への育児支援として、孤立せず、子育てができるような環境作りが必要である。

一方、子育てしながら働いている就労者の社会との繋がりは、子育て仲間との地域の繋がりとはいくつか、仕事そのもので、社会に出ていっているという意識が社会と繋がっているという思いを強くしている可能性がある。しかし就労していれば、当然一人きりでは子育てできないので、何らかの支援体制を自ら作り出さなければならない。平成9年にK県が行なった「子育てに関する実態調査」⁶⁾によると、全体では57.3%の親が、さらに共働き世帯では

64.8%の親が、歩いて30分以内で行けるところに子どもの世話を頼める親族がいる、また共働き世帯の方が、共働きでない世帯に比べ家族人数が多い、という調査結果であった。就労している母親には、親族等の育児支援者がすでに存在している率が高いことが、今回の結果に影響したといえる。

次に、『親としての対応』は本調査のみに認められた因子である。母親の完全に家事をこなしたいのにできない不全感と他家の子どもとのトラブルを避けたいという思いが子どもにどう関わってよいかわからなくなるというストレスが窺われるが、この2つの変数がひとつの因子として抽出されたということが今回の対象者の心理的な特徴と考える。これについては、先行研究では抽出されなかった因子なので直接の比較は出来ない。現代社会を反映してのことなのかどうか、またその要因等、対象数を増やし、今後も検討を重ねる必要がある。子どもへの対応について苦慮しているというのが今回の対象者の特徴であり、それとともに自分の子ども以外の子どもにもどう対応していいのかがわからなくなっていることが予測できる。

また、子ども1人の数が首都圏の調査に比べて少ないことが今回の対象者の特徴でもあった。平成9年のK県の調査⁶⁾では、就学前児童の内、一人っ子の割合は24.3%であり、今回の結果と同様の割合であった。日下部らの調査⁴⁾では、子ども数や出生順位について母親がストレスを感じる要因に違いが認められなかったと述べている。しかし、今回の調査では、子ども数1人の方が『夫の無理解・非協力的態度』のストレスが高かった（表4参照）。この『夫の無理解・非協力的態度』は、対象者の属性に関わらず同じ構造を持つストレス因子として存在することも確認された。夫の育児への参加度が高い妻は、子どもへの肯定的な感情が増し、子どもに対する積極的な気持ちが出てくるが、夫の育児参加が低い妻では育児による制約感やフラストレーションが高い⁷⁾。妻の育児不安との関連をみた調査から、妻は夫に育児や家事等の実質的な援助が無理でも精神的支援は欲しいと思っている⁸⁾との報告もある。母親つまり妻と夫との関係性の状況によってストレス度は左右されることが予想される。特に子育て経験が浅い母親への支援としては、夫も含めた支援体制が必要といえる。今回の調査で、子ども数1人の母親の方がストレスが高かった背景には、身近に親族が多いというK県の特徴との関連もあるかもしれない。子どもの数が増えれば手助けする必要もあるが、1

人だと夫以外の周囲の親族にまかせてもいいと判断している夫もいることが予想されるが、これについては、今回の調査からは分析できないので今後の課題である。

さらに対象者の属性に関わらず同じ構造を持つストレス者として、『子どもにまわりつかれること』もあった。育児中の母親にとって子どもが示す行動全てがストレス者になり得る。さらに、子どもが発達することに伴い、母親がストレスを感じる要因つまりストレス者も変化する。特に3歳頃になると、いわゆる反抗期であり、対人関係の中でけんかをするなどの情緒・性格における問題が加わってることが予想される。服部⁹⁾は、反抗は独立心の1つの指標であるが、扱いが厄介なのは、この時期の子どもは心の中には独立したいという思いと、まだ甘え依存していたいという思いが同居しているからであり、相反する2つの思いを同時に強く持つため親の対応も複雑でむずかしくなると述べている。子どもの反応を正常な発達と捉えるか、扱いにくくなったと捉えるかで、ストレスの程度や対処行動にも影響を及ぼすと考える。母親が子どもの行動をどう受け止めていくかが重要であるといえる。

結 論

地方都市の乳幼児を持つ母親143人の育児ストレス者について、先行研究の結果と比較し、以下のことがわかった。

1. 先行研究との比較で因子構造に違いがみられたのは、第Ⅲ因子『一人きりの子育て・社会からの孤立』と第Ⅵ因子『親としての対応』であった。一人きりで子育てしていることは社会から孤立しているということも意味していた。第Ⅵ因子『親としての対応』は本調査対象者のみに抽出されており、特に子どものしつけへの関わりにとまどいを感じる様子が伝わってくるものであった。
2. 第Ⅳ因子『夫の無理解・非協力的態度』、第Ⅶ因子『子どもにまわりつかれること』は、サンプルが異なっても母親の育児ストレス者として同じ構造を持つことが確認された。
3. 先行研究と比較し、非就労の母親の方がストレスを感じやすいことが本調査対象者の特徴であった。非就労者は、就労者に比べ第Ⅰ因子『子どもの聞き

分けのない行動』、第Ⅲ因子『一人きりの子育て・社会からの孤立』がストレス者になる可能性が高いことが確認できた。非就労者が孤立せず、子育てしやすい環境作りの必要があることが示唆された。

4. 子ども1人の数が先行研究に比べて少ないことが今回の対象者の特徴であった。子ども数1人の方が、子ども数2人に比べ第Ⅳ因子『夫の無理解・非協力的態度』がストレス者になる可能性が高いことが確認できた。子育て経験が浅い両親への育児支援の必要性が示唆された。

謝 辞

今回の研究を実施するにあたり、快くご承諾くださいました各公的機関の皆様、調査にご協力くださいましたお母様方に、心から感謝申し上げます。

文 献

- 1) Richard S. Lazarus, Susan Folkman (1984) "Stress, Appraisal, and Coping". [本明寛, 春木豊, 織田正美訳 (2000) "ストレスの心理学 認知的評価と対処の研究 (1)", 実務教育出版, p3-229.]
- 2) 日下部典子, 坂野雄二 (1999) 育児に関わるストレス者の構造に関する検討. ヒューマンサイエンスリサーチ 8: 27-39.
- 3) 榮玲子, 舟越和代, 三浦浩美, 野口純子, 小川佳代, 松村恵子 (2003) 乳幼児期の子どもをもつ母親の育児ストレス (第1報) - 育児ストレス者の因子構造 -. 香川県立医療短期大学紀要 5: 59-68.
- 4) 日下部典子, 坂野雄二 (2001) 3歳児をもつ母親のストレス者. ストレス科学 15 (4): 276-283.
- 5) 坂間伊津美, 山崎喜比古, 川田智恵子 (1999) 育児ストレスの規定要因に関する研究. 日本公衆衛生雑誌 46 (4): 250-262.
- 6) 香川県 (1997) "子育てに関する実態調査" 調査報告書平成9年1月, p10-13.
- 7) 牧野カツコ, 中野由美子, 柏木恵子 (1996) "子どもの発達と父親の役割", ミネルヴァ書房, 京都, p59-72.
- 8) 高橋種昭, 高野陽, 小宮山要, 大日向雅美, 新道幸恵, 窪龍子 (1994) "父性の発達-新しい家族づくり-", 家政教育社, 東京, p65-88.
- 9) 服部祥子 (2000) "生涯人間発達論", 医学書院, 東京, p44.

受付日 2003年6月18日